ニューゲイト・ノヴェルとその背景*

北　條　文　緒

1.　ニューゲイト・ノヴェルと呼ばれる作品群

犯罪者を主人公にした英国小説は，18世紀以来いくつか存在した。デフォーの『モール・フランダース』(Daniel Defoe, *Mall Flanders*, 1722)やフィールデイングの『ジョナサン・ワイルド』(Henry Fielding, *Jonathan Wild*, 1743）などが先ず思い浮ぶ。18世紀末のゴシック・ロマンスには必らずといってよいほど犯罪者の影がつきまとっている。19世紀になってからは，スコットランドの作家ホッグの『義とせられた罪人の告白』（James Hogg, *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*, 1824）のような毛色の変った作品もある。

しかし1830年代から40年代にかけて犯罪者を主人公にした小説がいくつかあらわれたとき，数の上ではそれ以前，それ以後とくらべて特に多くはなかったが，それらが人気を博したために，またそうした作品の是非をめぐる論争が文壇をにぎわしたために，特にそれらはひとつのグループを形成する作品と見なされるようになった。そしてそれらの作品がニューゲイト・プリズンを連想させることから，ニューゲイト・ノヴェルと総称されるようになった。当時の書評のなかでは，ニューゲイト・シーンというような言葉は見えるが(1)，まだニューゲイト・ノヴェルという呼び方はおこなわれていない。いつからこの名称が使われ始めたかは確かめていないが，1910年代頃には「ニューゲイト・ノヴェル」とならんで「ニューゲイト・ロマンス」という呼び名がしばしば使われていた(2)。ゴシック・ロマンスの遺産を受けつぎながら，ノヴェル的性格もあわせもつこの作品群にたいしてノヴェルという名称が定着したのは興味深い。

ともあれ，ニューゲイト・ノヴェルという分類の本来の基準は，現在の視

点から作品を眺めた場合のその内的特長の共通性によるよりも，ある時期に，論争の俎上にのったか否かにある。必然的に分類の境界線ははなはだあいまいとなる。例えばデイケンズの作品には，そのほとんどに犯罪者が登場するが，厳密な意味でニューゲイト・ノヴェルと言えるのは『オリヴァー・ツウィスト』だけである。後に述べるように，この作品が発表当時，ブルワー・リトンの『ポール・クリフォード』や『ユージン・アラム』エインズワースの『ルクウッド』『ジャック・シエパド』と同類の作品であるという観点から論じられたからである。同じく犯罪者が作品のなかで大きな比重を占めていても，『大いなる遺産』や『エドウィン・ドルードの謎』が書かれたころには，ニューゲイト・ノヴェルをめぐる論議はすでに過去のものとなっていた。

このようなわけで，ニューゲイト・ノヴェルのみに共通する特長を挙げることはむつかしい。例えば小説中の重要な登場人物として犯罪者（多くの場合，実在の）が使われているということは，同じ時期にニューゲイト・ノヴェルのパロデイとして書かれたアンテイ・ニューゲイト・ノヴェルについてもあてはまることである。またニューゲイト・ノヴェルのもうひとつの特色として，犯罪者が理想化され，あるいは同情的に描かれていることがあげられるにしても，ほぼ同じ時期に論争の圏外にあって，しかも同様の特色をもつ作品もある。

ニューゲイト・ノヴェルに興味をもち始めて以来，そこから貴重な情報を得たという意味で多くを負っている本のひとつに，ホーリングズワース著『ニューゲイト・ノヴェル』(Keith Hollingsworth, *The Newgate Novel 1830—1847*, 1963) があるが，この著書はニューゲイト・ノヴェルの枠をかなり自由にひろげて，その周辺の犯罪小説に言及している。この小論もその方法にならい，ニューゲイト・ノヴェルという呼称のもとに，より広範囲の作品を想定している。例えばホーリングズワースがしているように，『オリヴァー・ツウイスト』のみならず『バーナビイ・ラッジ』や『マーティン・チャズリット』も，それ等がニューゲイト論争の時期の作品であり，本来の分類基準によるニューゲイト・ノヴェルと共通点をもっているという理由で，そ

の作品群のなかにふくめて考えている。またブルワーの作品との関連で，ゴドウインの『ケイリブ・ウイリアムズ』をもニューゲイト・ノヴェルという視界のなかにふくめる必要を感じている。一方で貧困のために犯罪をおかす者に同情しながらも，他方下層の者たちにたいしてぬきがたい軽蔑をもっているヴィクトリア朝のミドルクラスの読者たちの精神構造をさかのぼれば，『モール・フランダース』のような作品も論じることが必要になるだろう。しかしそのような広大なパースペクテイヴのもとで犯罪小説の流れを把握することは後日の課題として，この小論では一応1830年代と40年代のニューゲイト・ノヴェルというカテゴリイを目安に，ニューゲイト・ノヴェルをめぐる論争と何らかのかかわりをもった小説群について，その社会的文壇的背景を考えることにした。そのような小説のうち主要なものを作家別にかかげると次のようである。

ブルワー・リトン(3) (Edward Lytton Bulwer, 1803—1873)
『ポール・クリフォード』(*Paul Clifford*, 1830)
『ユージン・アラム』(*Eugene Aram*, 1832)
『ルクリシア』(*Lucretia*, 1846)
ディケンズ (Charles Dickens, 1812—1870)
『オリヴァー・ツウィスト』(*Oliver Twist*, 1837—9)
『バーナビイ・ラッジ』(*Barnaby Rudge*, 1841)
『マーティン・チャズリット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843—4)
エインズワース (William Harrison Ainworth, 1805—1882)
『ルクウッド』(*Rookwood*, 1834)
『ジャック・シェパド』(*Jack Sheppard*, 1839)
サッカレイ (William Makepeace Thackeray, 1811—1863)
『キャサリン』(*Catherine*, 1839—40)
『虚栄の市』(*Vanity Fair*, 1848)

2. 刑法改正と監獄改良への働き

以上のような小説に主人公，ないし重要な人物として登場する犯罪者は，先に述べたようにほとんどが下層階級に属しており，またいくつかの場合には歴史上に実在した人間である。1830年代から40年代にかけて，そのような人間を扱った小説が書かれ，かつそれらが注目を集めたことの社会的背景としてどのような事情が考えられるだろうか。

そもそも犯罪者を英雄的にあるいは同情的に描き，人心を毒する小説というカテゴリーが1830年代に一部の識者の意識のなかに形成されはじめたとき，年代的にその小説群の最初に位置するのがブルワーの『ポール・クリフォード』だったが，この作品の執筆にまつわるふたつの事実がニューゲイト・ノヴェルの社会的背景を説明する手がかりになる。

そのひとつは，『ポール・クリフォード』の1840年版に付した序文のなかで作者が述べているように，この作品の重要なねらいが刑法制度の欠陥に世間の目をむけさせることにあった，という事実である。その欠陥とは作者の言葉を借りれば，

「我々の刑法制度の二つの誤り，即ち悪の温床である監獄の風紀と，苛酷な刑法――彼に償いをさせるはずの処罰によって逆に少年を堕落させ，次に我々自身の過失をとりのぞく最も安易な方法として，一番早い機会に彼を絞首刑にする習慣」(4)

であった。この意図が作品のなかでどの程度実現されたかは別の機会に考えることにして，ここではブルワーがとり上げた刑法と監獄の問題について当時の実状を見ておこう。

(i) 刑法の改正

刑法改正の動きは1810年前後から起っていた。「これほど多くの，多種にわたる人間の行為が死によって罰せられる国は，イギリスの他にないであろう」(5) 運動の主導者ロミリイ卿 (Sir Samuel Romilly) のこの言葉に言いあらわされているように，刑法改正への動きはまず刑法が苛酷すぎるという反省に端を発していた。18世紀以来，英国の刑法では殺人罪，反逆罪は言う

におよばず，諸種の窃盗罪，極端な場合には空巣にはいって五シリング相当のものを盗むというような犯罪にも死刑が適用されていた。(6) 死刑が適用され得る犯罪の種類は二百あまりもあったようである。その数が正確に把握できないのは，諸々の法令がその場その場の必要に応じて作られていった結果，刑法全体が全く組織を欠き錯綜してしまったからしい。そのような刑法を再編成することも1820年代には急務であった。(7)

ともあれ，その恣意的で苛酷な刑法に何らかの原則があったとすれば，それは私有財産の保護であった。窃盗罪に関する規定が詳細をきわめ，家宅侵入の場合には12ペンス以上奪えば死刑，空巣の場合には5シリング以上，馬を盗った場合，羊を盗った場合，という風に制定法で細かくわけられている一方では，殺意をもって人に傷を負わせた場合について特定の刑罰が19世紀始めまで規定されておらず，その行為は単なる微罪のカテゴリイに属していたという事実が如実にそれを語っている。数シリングのものをとれば死刑になるが，人を殺しそこなって重傷を負わせても罰金刑ないし禁固刑であった。(8)

もっとも刑法の苛酷さが，その運用の面で大幅に軽減されていたことを見落としてはならない。死刑が宣告された場合にも，恩赦というかたちでそれが流刑に軽減されることが多かった。ホーリングズワースが巻末に掲げている表によれば，死刑の判決を受けた者の数が千人以上に及んでいる1817年から1832年までの期間で，最も率の多い年でも実際に処刑されたのは10人に1人，少ない年には30人に1人の割合である。現在のような警察制度をもたなかった当時にあって，犯罪者が起訴をまぬがれる率が多かったことは別としても，人が微罪のために死刑に処せられることを好まなかった陪審員たちが，取り扱いに手加減を加えたこともしばしばあったようである。微罪のために死刑になると同じように，微罪であるが故に全く罰をまぬがれるということもあったわけである。『デイケンズと犯罪』(*Dickens and Crime*,1965)の著書フィリップ・コリンズ(Philip Collins)はそのような事情を述べ，刑法改正の真の推進力はロミリイ卿らの人道主義的主張よりも，むしろ私有財産を侵す者がより合理的な方法で確実に処罰されることを願った有産階級の

人々の請願だったと述べている。(9) 財産保護の原則から生じた刑法の苛酷さを軽減する運動が，その同じ原則から推進力を得ていたという事実は興味深い。持てる者と持たぬ者とのあいだに深まりつつあった溝のひとつのあらわれが刑法をめぐる問題であり，しかもその解決は，単に人道主義的主張だけでは導びかれ得なかった。

『ポール・クリフォード』のなかで，ブルワーがおこなっている主張は，もとより人道義的基盤に立っている。主人公ポール・クリフォードは幼なくして孤児になり，ロンドンのいかがわしい酒場の女主人に育てられる。16歳のとき，ぬれ衣を着せられて少年院に送られ，そこで悪い感化をうけて出所後追いはぎの一団に加わる。やがて逮捕され裁判で死刑の判決を受けるのだが，その場面で作者はポール・クリフォードにこう言わせている。

「あなた方の法律には二種類しかありません。ひとつが犯罪者を作り出し，もうひとつが彼等を処罰するのです。私はひとつの法律のために苦しみ，もうひとつの法律によってまもなく死のうとしています。（中略）あなた方の法律が私を今のような私にしたのです！　そして私をそのような者にしたが故に，法律は今まで何千人もの人間を破滅させたように，今や私をほろぼすのです！（中略）法に守られている方々は法が保護者だと思うがいい。一体いつ法が私を守ったでしょうか。法が貧しい人間を守ったことがかってあったでしょうか」(10)

このような社会観には，ウイリアム・ゴドウインの影響が色濃く出ている。しかしその社会観が刑法改正や監獄の改善というより具体的な問題との関連において提示されている点で，『ポール・クリフォード』は社会小説と呼ばれる資格を『ケイリブ・ウイリアムズ』よりも明確にそなえている。カザミアンの『英国の社会小説』（Louis Cazamian, *The Social Novel in England, 1830—1850*）のなかで『ポール・クリフォード』は一セクションを費して論じられている最初の作品だが，ニューゲイト・ノヴェルの最初に位置する作品が同時に19世紀の一連の社会小説の最初に来る作品でもあるということは重要である。『ポール・クリフォード』が出たのは偶然にも英国の産業革命の完成の一応の目じるしとみなされる1830年だったが，しだいに

その深刻さを増していた社会問題への関心が，ニューゲイト・ノヴェルの背後にもあるのである。そうした社会的関心は刑法の改正がおこなわれた後にも種々な形をとって『オリヴァー・ツウィスト』をはじめ殆んどのニューゲイト・ノヴェルの底流に存在している。勿論社会的関心の高まりは作家の側だけの現象ではなかった。カザミアンも指摘するように(11) 社会問題にたいして鋭敏な触覚をもった読者たちの出現を考えなければならないが，これは後にニューゲイト・ノヴェルの読者の問題を扱うときにふれることにしよう。

× × ×

刑法は『ポール・クリフォード』の前後から徐々に改正された。1827年，28年，30年と，死刑が適用される犯罪のなかですでに実体を失っているものについての規定が廃されたが，大幅な改正は32年まで待たねばならなかった。32年の改正によって，貨幣偽造，馬羊等の家畜を盗む行為，殆んどの種類の文書偽造から死刑の規定がとり除かれ，その結果死刑の判決が歴然と減少した。(12) ついで1833年，34年に死刑の適用される犯罪の範囲がせばめられ，さらに37年の改正を経て39年には死刑が適用されるのは大逆罪，殺人罪ほか12の項目のみとなった。(13)

(ii) 監獄の状態

刑法とならんで『ポール・クリフォード』のなかでブルワーが問題にしている監獄の状態に目を転じよう。先に引用した法廷の同じ場面でポール・クリフォードはこうも言う。

「7年前に私は自分が犯したのではない罪のために感化院に送られました。そこに入ったときはひとつの法も侵したことのない少年だった私は，数週間後にそこを出るときにはあらゆる法を破ることをものともしない男となっていました。（中略）あなたがたは先づ私が受けるいわれのない罰によって私をしいたげ，さらに私を悪の常習者たち，悪や悪によって生計をたてる方法を知りぬいた者たちと一緒の群に入れることによって，いためつけたのです」(14)

1830年前後のロンドンの監獄について書かれたものを読むと，このポール・クリフォードの証言を裏付けるような監獄のイメージが浮かび上がる。例え

ばメィヒュウの『大都会ロンドン』(Henry Mayhew, *The Great World of London*) は，当時の監獄の食物，換気，排水等の悪さや風紀の乱れ，賄賂の横行などについていくつかの証言をのせている。全体として監獄がかなりの改善を経たはずの1850年においてさえ，『ポール・クリフォード』の筋書きを地で行くようなこんな証言もある。

「田舎から出て来たばかりのうぶで健康そうな16歳くらいの下女がブローチを盗んだと女主人に訴えられた。この娘は女のうちで最も堕落した連中と同じ部屋にいれられ，一日中そこで過し夜もそこで寝た。（中略）そんな監獄でいつもそうであるように，彼女らは一日中自分たちのさまざまな悪業の話をして過した。ニューゲイトで公判を待つ二，三週間のうちに，その少女の心は悪という悪になじまされてしまった。公判の日が来て，彼女にたいする証拠は全く不充分で，その娘は釈放された。ニューゲイトに入ったとき彼女が無垢だったことは疑いない。だが出るときの状態がどうであったか誰が保証できよう。」(15)

刑法と同様，監獄の状態も1830年代から徐々に改善され，その本来の目的にかなう施設へと変えられていった。しかし前にも述べたように，刑法も監獄も氷山の一角である。ブルワーは社会小説に先鞭をつけただけで終ったが，『ポール・クリフォード』に見られる問題意識は，やが1840年代に大衆むけの廉価本が出るようになったとき，レイノルズの『ロンドンの謎』(George W. M. Reynolds, *The Mysteries of London*, 1845—1848) のような作品のなかに，最も尖鋭な形で受けつがれてゆく。

3. ニューゲイト・キャレンダーおよびその他の犯罪ニュース

ここで86頁に話を戻して，『ポール・クリフォード』の執筆に関して，もうひとつの興味ある事実があったことを思い出そう。それはこの小説の主人公をえらぶために，ブルワーが妻ロジーナと共に，『ニューゲイト・キャレンダー』(*The Newgate Calendar*) を読み漁ったという事実である。(16)

『ニューゲイト・キャレンダー』とは18世紀初頭以来ニューゲイト監獄に

入れられた有名な凶悪犯ひとりひとりについて，その生い立ち，犯罪の動機，裁判の経過と判決，犯人の悔恨，処刑の模模，処刑前の犯人の最後の言葉などを書いたものである。裁判関係の記録を事務弁護士が提供し，最後まで死刑囚の身近かにいる教誨師が書くならわしであった。多くの場合著者の名前が伏せてあるのは，教誨師という職権によって金をもうけていることの後めたさのせいであったらしい。(17) 全体のトーンは教訓的で，若い人たちの人生の道しるべになることが意図されている。18世紀初め以来何人かの著者によっていくつかの版が出たが，1771年に出た全5巻の『ニューゲイト・キャレンダー』がいはば決定版となった。18，19世紀をつうじていく度も版を重ね，また近年のペーパーバック版に至るまで幾多の縮少版の底本となっている。実際『ニューゲイト・キャレンダー』に限らず凶悪犯人に関する読み物の滲透度は，今日の生活感覚をもってしてははかりがたいものがある。例えば現在，我々は時たま凶悪な殺人事件の報道を新聞で読む。犯人が逮捕されたときにはその生い立ちなどが書かれ，死刑の是否が論議されたりすることもある。しかしその種の情報は，いっとき後味のわるい印象を残しはするが，次々になだれこんでくる他の情報にすぐ押し流されてしまう。そんな状態とはまるでちがう一時期の英国の風俗を我々は思い描かなければならない。

凶悪な犯罪事件は，新聞雑誌はもとより貧しい人たちのためには一部半ペニイないし一ペニイのブロードサイドで報道された。ブロードサイドには適当な訳語がないが，片面だけ印刷されたほぼタブロイド判の大きさの新聞である。ブロードサイドはもっぱら特定の事件だけを伝えたが，普通の新聞も犯罪ニュースで振わっていた。『ドンビイ父子商会』(Dickens, *Dombey and Son*, 1846—8) のなかでドンビイ夫人の死後，ドンビイ氏の命令で家じゅうの家具に新聞紙でおおいがかけられるところがある。「呼び鈴の把手，窓のブラインド，姿見は日刊や週刊の新聞ですっぽりおおわれ，死や怖ろしい殺人の記事を断片的に見せつけていた」(18) とそこに書いてある。

犯罪者の辿る運命を見せることが，犯罪への歯どめになるという考えにもとづいて，当時死刑は公開であり，その日興奮は頂点に達した。人々は階級の如何をとわず，芝居を見るように絞首台のまわりにむらがり，その場

所に近い家の持ち主たちは多大の席料をとって部屋や窓を見物人に提供した。サッカレイの『イエロウスプラッシュ・ペーパーズ』（*Yellowsplush Papers*, 1838）にも，処刑があるたびにニューゲイト監獄の真向いにある部屋を貸して，毎年50ポンド以上の収入を得ている男の話が出てくる。(19)

絞首に使われたロープはそのあと一インチづつに切られ，法外な値で買手がついた。ブルワーが『ユージン・アラム』を書いた直後に，ブルワーをあまり心よく思っていなかった作家のピアース・イーガン（Pierce Egan, 1772—1849）が彼を訪れ，『ユージン・アラム』の作者こそ，この宝を持つにふさわしいと言って絹の袋をとり出して開いた。なかから出てきた奇怪なものを，これはサーテル（19世紀の有名な殺人犯）の大網膜だと言ったという話も伝わっている。(20) そのような気味の悪いもののコレクションも流行していたらしい。

犯罪者をうたったバラッドや，その告白や「最後の言葉」を刷ったブロードサイドは，どんなベストセラーの小説もおよばぬ発行部数をもっていた。19世紀の初めには，ロンドンのセヴン・ダイアルズ（Seven Dials）と呼ばれる地域の出版業者たちがその種の印刷を一手にまかなっていた。そのなかで最も有力な業者ジェイムズ・キャッナック（James Catnach）(21)は1820年代の有名な殺人事件であるサーテル事件の際，4台の印刷機をフルに回転させ一週のうちに「ジョン・サーテルとその共犯者によるウェア氏殺害の完全，真実，かつ詳細な記述」（"Full, True and Particular Account of the Murder of Mr. Weare by John Thurtell and His Companions"）というパンフレットを，25万部刷ったという。さらにサーテルの裁判が始まるとその様子を報道する印刷物は50万部に達した。(22) サム・ウェラーの登場と共に，『ピックウィック・ペーパーズ』（*Pickwick Papers*, 1836—7）の売れ行きが爆発的に伸びたときでさえ，その部数は4万部だった。(23)

殺人事件を報ずるパンフレットやブロードサイドは「デス・ハンター」（death hunters 殺人のニュースを専門にあつかう）とか「ラニング・パトラー」（running patterers 走りまわって宣伝しつつ売る）とか呼ばれる売り子たちが売りさばいた。これらの売り子については，ロンドンの下層社会

の生態をくわしく描いたメイヒュウの著作に詳しいが[24] レイノルズの『ロンドンの謎』のなかにも妻を殺して身をかくしている男が，自分の犯行がニュースになって売られているのを聞くくだりがある。売り子はこんな風に叫ぶ。

「極悪人のウイリアム・ボルダーがやったおそろしい女房殺しの事件の全貌を書いた新聞！　殺人者の似顔や，犯行が発見されたときの部屋の様子が書いてあるよ！　たったの1ペニイ！　これ以上完全な記事はないよ！　たったの1ペニイ！」[25]

メイヒュウによれば，売り子は買う気持をかきたてるべく，事件の内容はよくわからせないように，「おそろしい」とか「残酷な」とか「殺人」「謎につつまれた」といった言葉をことさら大声で叫んだとある。

やはりメイヒュウによれば，セヴン・ダイアルズの出版業者のためにバラッドやパンフレットの文章を書く売文業者が幾人かいたらしい。彼らがキャッナック等の注文に応じて書くこともあれば，自分たちの方から書いたものを持ちこむこともした。材料は殺人に限らず火事や災害，有名な人の結婚や死，ユーレイが出た話なども扱ったが概して殺人を扱ったものが一番よい売れゆきを示した。手近かによい材材のないときには，センセーショナルな事件が捏造された。

死刑囚の「最後の言葉」などは，先に述べたようにニューゲイト監獄の教誨師の役得だったらしいが，これもどこまでが犯人の言葉であったかはすこぶるうたがわしい。第一，そのようなブロードサイドは処刑の直後に売られたが，そのためにはかなり前から文章が出来ていなければならない。教誨師がその職務にふさわしく適当にざんげの言葉を折りこんで作文をしたというところではないだろうか。近年復刻されたアメリカのブロードサイド集のなかに「最後の言葉」を刷った18世紀後半のものが数枚ある。ブルワーの『ユージン・アラム』がイギリスで評判になったとき，すぐさまユージン・アラムに関するパンフレットがボストンで出ているような状態から考えて，アメリカのブロードサイドはほぼ英国のものと同じとみなしてよいと思われる。いづれも死刑囚の言葉はこんな調子で終っている。

「我々の不幸な運命が若い人たちへのげんしゅくな戒めとなり，彼等が悪と不道徳の道をすてて，徳と幸福へ至る道を求めることを我々ふたりは心から祈る。どうかあなた方の御両親に従順であり，御両親の忠告に耳をかたむけられよ。罪の母であり，よこしまなおこないの源である怠惰をすてられよ。（中略）

おお永遠なる恵み深きエホバよ。あと数時間で，我々は地上の生命を去り，霊の世界に入らなければならぬ。慈愛あふるる神よ。我々は切に汝に乞いねがう。我々の不死の魂を，祝福せられたる不滅の館に受け入れ給え」(26)

血なまぐさい犯罪のニュースや，公開の処刑がなぜそれほど人々を惹きつけたのだろうか。勿論人間には恐怖をかきたてるものを求める本性がある。処刑を見に集まる人々や『ニューゲイト・キャレンダー』の読者は貧富の別なくあらゆる階層にわたっていた。しかしこれといった娯楽をもたぬその時代の庶民たち，なかでも田園をはなれ賃金労働者として大都市に流れこんだ庶民たちは殊に，その単調な生活のなかでどぎつい刺激を求めたであろう。犯罪ニュースはそんな人々に，娯楽としての役目も果たしていたにちがいない。

一口に娯楽と言っても，犯罪者にたいする人々の気持には複雑な屈折があったと思われる。彼らはまず，自分たちが僅かな自制心を失い，なんらかの欲望に身をゆだねることによって辿ったかもしれない運命を犯罪人のなかに見る。そして自分がアウトカストにならなかったことに安堵感を持つであろう。だが一方，彼らは自分たちが送っている小心翼々とした単調な生活をかえりみて，ある種の羨望感，あるいはそれが裏返しになった復讐心を犯罪者にたいして抱いたかもしれない。(27) それとも処刑台を前にして犯人が堂々たるスピーチでもすれば，その度胸にたいして英雄崇拝に似た感情をもっただろうか。

ともあれ『ニューゲイト・キャレンダー』やブロードサイドの魅力は，それらがセンセーナショナルであると同時に，ひとつまちがえば自分もその犯罪者と同じ運命をたどったかもしれないという身近かさの感覚，事件がどこ

か遠い国の荒廃した城を舞台にしているのではなく，自分の住む同じ社会に起った出来事だという意識——事実性とでも呼ぶべきもの——をあたえることにあったと言えよう。『ニューゲイト・キャレンダー』を一生懸命読んだブルワーは，人々のそうような趣好を鋭敏に察知していた。結果的には作品のための適当な主人公を『ニューゲイト・キャレンダー』のなかに見つけることは出来ず，架空の主人公ポール・クリフォードが生まれたが，犯罪者を扱った彼の次の小説『ユージン・アラム』では，主人公は同名の18世紀の有名な殺人犯であり，『ニューゲイト・キャレンダー』の人物である。また他の作家について見れば，エインズワースの作品には，それぞれ『ニューゲイト・キャレンダー』に名をとどめている有名な盗賊ディック・ターピンとジャック・シェパドが登場する。デイケンズの場合には『マーティン・チャズリット』のジョナス・チャズリットがその頃毒殺事件の犯人として新聞をにぎわしたウェインライトをモデルにしているといわれる以外，特に『ニューゲイト・キャレンダー』やその種の犯罪実話に取材した事実はないが，一般の英国人同様，少年の頃からそうした読み物にふれる機会があったことは，フォースターの伝記の次のような一節からうかがい知ることができる。

「学校にいた時分，『テリフィック・レジスター』を取っていて，毎週一ペニイという僅かの金とひきかえに，いいようもなくみじめな気持になったり，恐怖でぼうっとなったりした。毎号ごとに一枚は挿絵があり，それにはいつも血の海，そして少なくとも一個の死体があったことを思えば，一ペニイは安い値段だった。」(28)

この種の安い出版物のことは後にふれるが『ニューゲイト・キャレンダー』がしばしば『マルファクターズ・レジスター』(*Malefactor's Register*) というタイトルで出版されていたことから考えても，この『テリフィックレジスター』はその系列の読物だったと推定される。

以上見たように，ニューゲイト・ノヴェルは，18世紀以来のニューゲイト・キャレンダーの世界をその背後にもっている。そしてセンセーショナリズムと事実性という性格をそこから受けついでいる。

4. センセーショナルな読み物としての『殉教者伝』や宗教雑誌

しかし人々に広く読まれたセンセーショナルな読み物は犯罪ニュースだけではなかった。古くはジョン・フォックスの『殉教者伝』(John Foxe, *The Book of Martyrs*) に描かれた殉教者たちの凄絶な最期や，19世紀の始めのころにエヴアンジェリカリストやメソデイストの牧師たちが神の怒りを説く激烈な調子の説教でくりひろげてみせた地獄図なども，人々の脳裏にやきつき，ぬぐいさりがたいイメージを植えつけていた。

先ず19世紀初頭の宗教雑誌，就中メソデイズムの雑誌に目をむけると，例えば1810年代から20年代にかけてのメソデイスト・マガジンには「あかしせられたる神の摂理」(“The Providence of God Asserted”) という欄のなかに，神を冒瀆した者がいかに怖ろしい死を迎えたか，といったたぐいの実話が読者からの投書という形でいくつも紹介されている。また同じ時期の別のメソジストの雑誌 (*The New Methodist Magazine*) には同様のエピソードに加えて，犯罪実話や宗教裁判の話も散見する。それらはいづれも宣教の手段として意図されているのだが，読者の側では別の読み方もしていただろうと推測される。ニューゲイト・キャレンダーや，後述するフォックスの殉教者伝になじんだ感性が，つねに恐怖や残酷なイメージを求めていたとすれば，それは幾分かは次にその一部を例として引用するような実話によってみたされたのではないだろうか。私利私欲だけの船長が嵐で死んだ乗組員の遺体を放棄し，難破船から積荷だけを下ろそうとするが，神の怒りにふれ，ころげおちてきた材木に足をはさまれて命を落とすという話である。

「一刻の猶予もならなかった。潮はすでに満ちはじめていた。船員たちは(中略)出来るかぎりのことをして彼を助け出そうとしたが無駄だった。潮がどんどん満ちてきたので，彼らは不本意ながらも船長をその運命にゆだねるより他なかった。いまや良心呵責の重荷に打ちのめされ，折れた脚の痛みと自分にのしかかってくる物体の巨大な重みの下で呻き，彼は身動きができず，次第次第に水は上って来て，彼の命をうばった。」(29)

メソジスト・マガジンが1822年にウェズリイアン・メソジスト・マガジン（*The Wesleyan Methodsit Magazine*）と改称された際，編集にも多少の変更があったが，そのときの趣意書のなかで，編集者は「その全ての読者が満足するような材料を提供する月刊誌を作り，潔癖と威厳をもっておこないうるかぎり，読者のさまざまな趣好と要請に答えるよう努める」と約束している。神の摂理と恩寵の証しを伝えるという大きな枠組のなかで，読者のセンセーショナルなものへの関心も幾分かみたされていただろうという推測が裏付けられよう。

前に述べたようにこの種の雑誌に時折犯罪実話がのっているが，人間の罪にたいする神の無限の怒りを強調するメソデイズムの教義にふさわしく，そうした実話のなかで犯罪者の死は全く冷酷な態度で扱われている。例えば知人を毒殺した男がその犯行を追求され，自分も毒を飲んで自殺する話の結末は，こう書かれている。

「その男の親族は，彼を聖ミカエル教会の墓地に理葬することを拒否されたので，その男の土地に理葬しようとした。しかしこのもくろみも敬虔な人々のきびしい非難によってはばまれた。というのは巡査のひとりが男を棺にいれず，スピトル・バールに近い十字路へこやし車にのせて運び，その場所でおろかしい迷信にしたがって，そのおおいのない死体にくいをさしとおし，南北を結んで堀られた墓にそれを埋めた」(30)

「敬虔さ」の表現がこのような形をとっていることはおもしろい。こうした描き方を見ると，例えば公開の処刑を見にゆくことはむしろ敬虔な行為であり，ニューゲイト・キャレンダーと，メソデイズムが提供した読み物とは，その意図において重なり合う部分もあったわけである。そして神の冒瀆者たちの辿る怖ろしい末路を描く実話がニューゲイト・キャレンダーと重なり合うとすれば，殉教者たちの受けた迫害の物語はフォックスの殉教者伝のような読み物と類似しており，両系列の読み物を掲載したメソデイズム諸雑誌は両系列の読み物の混合物的存在だったと言えよう。

フオックスの『殉教者伝』が書かれたのは16世紀にさかのぼる。正式の書名は『危機的な近年の功業』(*Acts and Monuments of These Latter*

Perilous Days）といい，1563年に出版され，1570年に増補された。英国国教会で聖書と併用された結果，聖書と同様ふつうの家庭に一冊はあるような，本とはおよそ無縁な半ば文盲の人たちでも知っているような書物となった。デイケンズの小説に登場するインテリとはいえない人たちもこの書物の名を口にしている。(31)『殉教者伝』はイエス・キリストの生涯と受難，12使徒の殉教の記述にはじまって，ローマ皇帝以来，ブラデイ・メアリーに至るまでキリスト教徒，殊にプロテスタント信者たちが受けた迫害を記録している。著者のジョンフオックス自身，メアリー女王の治世に国外に逃れ，後にエリザベスの庇護をうけたプロテスタントだった。殉教者たちについて迫害を受けるにいたったいきさつや，尋問，拷問の様子，そして殉教の記述があるが，筆致には特に煽情的なところはない。

「数人の男女と子供が岩から突き落され，粉々にくだかれた。その中にはラ・トレのプロテストの婦人マグダレン・ベルテイノがいたが，彼女は衣服をはがれ，断崖から投げ落とされた。同じ町のメリ・レイモンデは骨から肉をそぎ落されて死んだ。ヴイラロのマグダレン・ピロはキヤテラスの洞穴で切りきざまれた。アン・シャルボニエは息がたえるまで地面に串ざしにされて置かれた。ヴイラロの教会の長老ジェイコブ・プリンは弟のデヴッドと共に生きながら皮膚をはがれた」(32)

といった調子で書かれている。

5. 殉教者と犯罪者

以上で概観したところの二系列の読み物――ニューゲイト・キャレンダーに代表される犯罪実話と，フオックスの殉教者伝に代表される宗教的読み物――は共に広く人々に滲透し，英国人の想像力に或るイメージを植えつけたように思われる。だがそれを考える前に，この二種の読み物がどのような形態で普及していたかを見ておきたい。

犯罪ニュースを伝える半ペニイや一ペニイのブロードサイドについてはすでにふれたが，ニューゲイト・キャレンダーやフオックスの殉教者伝のような大部の内容をもつ書物の場合には，本で出版されるほかに分冊出版の形態

がとられていた。分冊出版はデイケンズの作品とともに広く知られるようになったが，実際にはデイケンズ以前，18世紀末頃からおこなわれていた。そしてニューゲイト・キャレンダーや殉教者伝は，分冊出版で出された本のなかでもベスト・セラーズだった。(33)

犯罪実話と宗教的読み物の出版形態に共通するもうひとつの特色に版画がある。ブロードサイドの類に始まって大部の本に至るまで木版画あるいは銅版画がこの種の読み物の大きなアトラクションだった。

先に述べたアメリカのブロードサイドの複刻版で見ると「最後の言葉」につけられた木版画の場合には，いづれも群集の真中の絞首台に犯人がつるされており，そのそばに馬にのった役人がいるという，きわめて幼稚な構図である。12頁に結びの文章を引用した「最後の言葉」は家宅侵入の罪で処刑された２人の犯人のものだが，それに刷りこまれた木版画をよく見ると，他の単独の犯人の場合に用いられた版木に，つけたしをして絞首台を延長し，その延長部分にもう１人の犯人をつるさげる工夫がおこなわれている。イギリスのブロードサイドの場合も，木版画は全くお座なりのものであったらしく，同じ版画が異なる犯人の似顔のために用いられることもしばしばだったという。(34) 少年のデイケンズに血の凍る思いをさせた『テリフィック・レジスター』類の版画にも，おそらく限られた数のステレオタイプがくり返し使われていたのだろう。

フオックスの殉教者伝にも，18世紀以来のほとんどの版に，多くの版画が入っていた。キリストの磔刑をはじめ，石で打たれ，あるいは生きながら皮膚をはがれ，あるいは拷問台にかけられ，あるいは体中に蜜をぬられて蜂のむらがる木につるされ，あるいは燃えさかる火で焼かれる殉教者たちを描いたものである。そしてそうした版画がアトラクションであったことは，新しい版が出るたびに，「××枚の鋼版画入り」といった言葉が本の扉に見えることからもうかがわれる。ニューゲイト・キャレンダーの場合も，同様である。

版画は勿論色刷りではなく，１枚がふつう縦７センチ，横10センチほどの大きさで，概して幼稚なものである。時には版画が小さいために殉教者の顔

の表情まで読みとることはできないが，それが読みとれる場合でも，鞭うたれたり炎に身を焼かれたりしている聖者たちは，あらかた無表情である。天をふりあおいだ顔に，すさまじい決意や恍惚，あるいは苦悶の表情はなく，顔だちに何らかの個人的な特長もなく，その意味ではリアルなものを伝えない。丁度ブロードサイドの木版画がどれも同じ図柄であり，同じ版画が異なる犯人について用いられたように。勿論版画技術の限界ということもあっただろう。しかしそれがどんなお座なりな，ほとんど記号的な図柄であっても，人々に求められたという事実，版画が多いことが売りものだったという事実は興味深い。それらの版画はあらゆる個別的なものを捨象した記号的な図であったがために，いっそう激しく想像力に訴えたのではないだろうか。つまりその図は，ある象徴のような機能をもって読者に働きかけ，各々の読者はその象徴から各自で細部を補い，イメージを作り上げ，それによって人生や死の恐怖に立ちむかおうとしていたのではないだろうか。そして読者の想像力のなかでは殉教者の像とニューゲイト・キャレンダーの数多くの刑死者の像とは重なりあい，つまり殉教者でもある犯罪者，殉教者の相を帯びた犯罪者というひとつのイメージとなって，灼きついていたのではないだろうか。刑法問題について述べたときすでに名前の出たロミリイ卿が少年時代を回顧して書いている言葉は暗示的である。

「殉教者伝やニューゲイト・キャレンダーで見る版画は，私から幾晩も眠りをうばった。夢もまた，ひるま私の心につきまとう怖ろしいイメージでかき乱された。夢のなかで私は処刑や殺人や血ぬられた惨劇の現場にいた。闇のなかで目をさましているのも怖ろしく，また怖ろしい夢を見るかと思うと眠るのも怖ろしく，恐怖で気持をたかぶらせてベッドに横たわっていたこともしばしばだった」(35)

対照的な内容をもつふたつのイメージ——世間の掟を踏みはずした犯罪者の像と，世間の掟を越えた掟を奉じた殉教者の像とが，刑死者のイメージにおいて重なり合っていたことを，以上の言葉は裏付けていると思われる。ふたつのイメージが重なり合っていたのは，少年の悪夢のなかだけではなかった。デイケンズは公開処刑への反対をとなえた手紙のなかで，公開処刑は人

々の目に，犯罪者をあたかも殉教者のように見せ，病的な同情心をあおるから有害だ，という意味のことを述べている。(36)

そのようなところにも暗示されているように，ニューゲイト・ノヴェルが出現する時期以前の人々の想像力のなかで犯罪者処刑のイメージが殉教者のそれと結びついていたとすれば，刑法改正というような，あるいはさらに広く産業革命の完成にむかいつつあった英国で社会の矛盾がより鋭く人々の意識にのぼりつつあったというような，直接的な引き金の作用した時期に，その同じ想像力の土壌から現われたニューゲイト・ノヴェルが，聖人でもある殺人犯，スケイプゴートでもある犯罪者の映像を作品の中心に持っていることに不思議はないだろう。実際，そのイメージは，作家により作品によってヴァリエイションを生みながら，さまざまに肉付けされて，ニューゲイト・ノヴェルのなかに受けつがれている。そして犯罪者の処刑は彼を殉教者のように見せると言ったデイケンズ自身の作品のなかで，犯罪者はもっとも鮮明にスケイプゴートの表情を帯びているのではないだろうか。

『英国の一般読者』のなかで著者アルティックは，メソデイズムやエヴァンジェリカリズムの読み物のセンセーショナリズムにふれ，それらは「主として文体よりも内容によって」読者の興奮をかきたてたと書いている。(37) そのことは以上でおこなったいくつかの引用からもうかがい知られよう。いかにセンセーショナルな話題にせよ，それを伝える文体そのものは簡素で個性にとぼしい。ニューゲイト・キャレンダーにも共通するこの没個性的文体は先に述べた版画の没個性的性格と符合しており，そのような文体もまた一般読者が意識の深みで共有しているシンボリックなイメージを育てたと思われる。だが同時にそれら読み物の内容を考えとき，それがおよそ小説文学がその発生以来持ちつづけてきたところの個別的，具体的なものにたいする関心を示していることにも注目しなければならない。

つまり，ニューゲイト・キャレンダーにせよ殉教者伝にせよ，「怖ろしい死」のエピソードにせよ，それらは全て実話であり，某は何年にしかじかの土地において云々というデイテールをともなっている。死刑囚の「最後の言

葉」の場合のように信憑性のうすい場合でも，それが正真正銘彼の口から出た言葉というふれこみで売られた。「事実にもとづく話」「正真正銘の告白」といったたぐいのキャッチフレーズは，そこに描かれた話がフィクションではないことの強調が人々の興味をかきたてるのに不可欠だったことを示している。19世紀始めのメソデイスト・マガジンのインデックスには「××のおそろしい末路」「××のおそろしい自殺」「××のおそろしい死」「××の地で起きたおそろしい出来事」というようにオーフル（awful）という言葉が頻出している。無論オーフルとは宗教的畏怖の念から発された言葉だが，同時にそれが同時代に現実に起った事件であり，現在は傍観者である自分とても同じ運命にあうかもしれないのだという意識によって恐怖の度合いは強められていよう。このように一方ではシムボリックなイメージを植えつけながら，他方では旺盛な現実への関心を持っていたことが，幾多の残酷な死を扱った大衆の読み物を特長づけていたように思われる。

6. 文壇的背景

ニューゲイト・ノヴェルが登場するころ英国の文壇はどのような様相を呈していただろうか。

1830年頃には，アン・ラドクリフ（Mrs. Ann Radcliff）に代表されるゴシックロマンスはすでに後退しつつあり，ゴシック・ロマンスの流れをくむセンチメンタルでセンセーショナルな大衆むきの小説の出版社として有名だったミネルヴア・プレスも他の方面の出版に方向を転じつつあった。(38) ゴドウイン，ホルクロフト（Holcoft）等，社会問題への関心を内蔵した小説の系譜は，ウオルター・スコット（Sir Walter Scott）が活躍した時期には一時中断されたかたちだった。勿論スコットにも現実への関心や，社会の動きにたいする健全な触覚はあるのだが，社会小説の系譜に加わるにはあまりにコンヴエンショナルな小説作法に依存していた。そのスコットの活躍も1820年代で終り，ディケンズの最初の作品があらわれるまでまだ数年あった。

そのいはば大作家空位の時期に「銀のフオーク派」(Silver Fork School) と呼ばれる，上流社会の風俗を描いた小説が流行した。土地所有にその経済

的基盤をもつ貴族にかわって，経済的政治的主導力を手中におさめつつあったブルジョワジーは，反面その趣味において貴族に追従していた。一方には都市の工場労働者の大群があり，急進的政治運動への参加や宗教の諸宗派による教育普及の努力の結果，読み書きの能力が彼らのあいだに少しづつ広まってゆく。このような状況にあって上流および中流階級が彼らのステイタスを守ろうとする排他的な姿勢が「銀のフォーク派」の流行を支えていた。舞踏会，晩餐会，オペラ，クラブを舞台に，上流の人々の会話やふるまい方，食事や衣服を忠実に写すことを，この種の小説は第一の眼目にしていた。「それらの作家たちの主たる長所は衣服に関する彼らの完璧な知識であり，主たる欠点はその衣服のなかに人間をいれ忘れたことだ」と1840年代の末に或るアメリカの批評家が書いている。(39) 人物描写に関しては銀のフォーク派の小説はおおむねスコット以前のセンチメンタルな小説の方法を踏襲していた。ブルワーやデイズレイリ（Disraeli）の作品の或るものは，その主人公の知的で真摯な内面を追求することが意図されているが故に，いわゆるファッショナブル・ノヴェルの枠をややはみ出した作品となっているが，セオドア・フック（Theodore Hook），リスタア（Lister），ワード（Ward），レデイ・シャロット・ベリイ（Lady Charlotte Bury），ミセズ・ゴア（Mrs. Gore）等銀のフォーク派を代表する作家は，今ではその名前さえ忘れられてしまった。

『銀のフォーク派』という題の40年ほど前に書かれた研究書のなかで(40) ブルワーの『ペラム』（*Pelham*, 1828）がこの派の最初のころの主要な作品のひとつとして論じられている。そしてサッカレイの『虚栄の市』が最後の頂点に位置する作品と考えられている。両作品がそのように位置づけられているのは注目を惹く。というのは，ニューゲイト・ノヴェルに関しても，このふたつの作品を初めと終りの目標として使うことができるからである。事実前にふれたホーリングワースの本は，『ペラム』を最初に取り上げている。上流社会を描いたこの小説には，傍人物ではあるが実在の殺人犯サーテルをモデルにしたといわれる犯罪者が登場する。『虚栄の市』もニューゲイト・ノヴェルと関連を持っており，上中流社会の風俗を描いた小説として眺めた場合と同様，ニューゲイト・ノヴェルとしてもエポック・メーキングな作品

である。とすれば『ペラム』から『虚栄の市』に至る約20年間に，上流社会により多く焦点をあてた小説の流れと，下層の人々の生活により多く焦点をあてた小説の流れとを考え，前者が銀のフォーク派，後者がニューゲイト派という図式化も可能であろう。キャサリン・ティロットスン（Kathleen Tillotson）は，カーライル（Carlyle）が『ペラム』を非難した反応として，ブルワーやエインズワースは，彼らのセンチメンタルな性格描写を下層生活にもちこんだ，と説明している。(41) 変りばえのしない上流風俗の描写に飽きた読者たちにニューゲイト・ノヴェルが新鮮なものに見えたことも事実だっただろう。

このように「銀のフォーク派」は時間的にはニューゲイト・ノヴェルに最も近い関係にあったが，勿論その他の幾つもの水脈がニューゲイト・ノヴェルに注ぎこんでいる。地下水のように国民的イマジネーションを養ったニューゲイト・キャレンダーや殉教者伝は別としても，ゴシック・ロマンス，18世紀のピカレスク小説，バイロンの詩等をあげることができる。それらからニューゲイト・ノヴェルはメロドラマテックな手法やセンセーショナリズム，あるいは現実批判の精神，あるいは強い自我と反逆の精神を受けついだ。受けつがれてゆく過程でゴシック・ロマンスがニューゲイト・ノヴェルへと変貌し，謎につつまれた架空の英雄マンフレッドは，その犯罪のデイテールを実在の人物から借用してユージン・アラムへと生れかわる。そしてその是否をめぐって詩と小説，ドラマと小説の差異が論じられ，小説というジャンル自体の可能性が堀りさげられていった。

× × ×

以上，社会的文学的背景を概観する過程で明らかになったことを，重複をおそれずにくり返すなら，それ以前またそれ以後の犯罪を扱った小説と比較した場合のニューゲイト・ノヴェルの特長を次の様に要約することができよう。

第一に，この作品群において扱われている犯罪が多かれ少なかれ社会問題との関連において把握されていること。つまり犯罪の動機が犯罪者の先天的異常性格とか感情の問題であるよりも，社会の下層に位置する人々の貧困，無智などによるものとして設定されている。産業革命を経て社会の矛盾を鋭

く露呈してきた英国の社会の実情がそこに反映されている。

第2の特色は，ニューゲイト・ノヴェルへの非難として用いられた言葉を使うなら「犯罪者の美化」である。作品の力点は犯罪者の内面の描写，彼らが犯行にいたるまでの，また犯行後の心理の追求におかれている。その描写によって彼らの苦しみや孤独，良心の呵責，時には自若たる態度が読者に印象づけられ，しばしば同情や崇拝をかきたてたが，そのような扱い方は犯罪者にたいして不寛容な目には「美化」と映じた。ここで先に述べたひとつのシムボリックな映像の二面——犯罪者と殉教者（あるいはスケイプゴート）——が問題となる。その交錯のありさまは作家により作品によって異るが，その諸相をたどることがニューゲイト・ノヴェルの研究のひとつの重要なポイントとなるであろう。

探偵小説史ともいうべき貴重な研究書の序論で，著者マーチ(A. E. March)は，探偵小説，犯罪小説，ミステリイ小説の三つのジャンルを比較している。それによれば，犯罪小説と探偵小説の違いは後者の目的が犯人を探し出す推理であるのにたいして，前者は犯罪そのものの描写が中心となる。またミステリー小説は何らかの謎が存在しそれが最後まで残る，もしくは偶然に（探偵の推理力を借りずに）謎が解かれる点で探偵小説と異っている。(42) このように分類によれば，ニューゲイト・ノヴェルはいうまでもなく犯罪小説のカテゴリイに入るだろう。ただ主要な関心は犯罪そのものよりもは犯罪者に注がれている。その実話的性格や社会問題への関心は，明らかに超自然的ミステリを排除している。また探偵小説との比較で強調されねばならないのは，探偵小説が法と秩序の側に立つのにたいして，先にも述べたように，ニューゲイト・ノヴェルは犯罪者を美化し，同情的態度を示していることである。マーチ夫人も言うように，探偵小説の系譜はニューゲイト・ノヴェルよりニューゲイト・キャレンダーの方に求められるべきであろう。(43)

7. ニューゲイト・ノヴェルの読者たち

最後に読者の問題にふれておきたい。この問題を重視するのは，読者層がしだいに部厚くなると共に分岐して，いわゆる大衆文学が生まれてゆくその

過程でニューゲイト・ノヴェルが果した役割に注目しなければならないからである。

英国において小説の読者は18世紀から19世紀にかけて非常な増大を見た。この現象にはふたつの面を考える必要がある。ひとつは読み書きの能力がより広く普及したということ，もうひとつは読み物がより入手しやすい，廉価な形態で出版されるようになったということである。

アルティックの『英国の一般読者』は，教育の滲透について次のような見取図をあたえてくれる。1770年頃からイギリス各地に設立されたサンデイ・スクールをはじめ，S・D・C・K・スクール(The Society for Promoting Christian Knowledge) またメソデイズム就中ウエズレィアニズムの努力が読み書き能力の普及に力をつくす。それらの教育機関がそのイデオロギイにおいて保守的であり，大衆にその分際をわきまえさせることが究極の狙いであったにせよ，また子供をそれに送り出すときには彼らが逃げ出さぬよう脚に大きなおもりをつけなければならないほど魅力にとぼしい場所であったにせよ，少なくともそれは貧しい階層の子供たちのあいだに聖書や宗教的読み物（フオックスの殉教者伝のような）を読む能力をいくらかはひろめた。一方ラジカルな政治運動も，18世紀の最後の10年間にはフランス革命に触発されて活潑であり，トーマス・ペイン（Thomas Paine ）のそれに代表されるような著作がかなり広く流布し，文字には無縁であった人々のあいだにも読書への関心をよびおこした。(44)

やはりアルティックによれば，ペインの『人間の権利』（*The Rights of Man*, 1791—2）の第1部は1冊3シリングであったもかかわらず，5万部売れた。もっと廉価な形でという要望に応えて，第2部は従来の形と平行して1冊6ペンスの廉価版でも発行された。そのとき，第1部も同様の廉価版で再版されたがそれはひと月のうちに3万2千部売れたという。ラジカルな意見に関心をもち，本が廉価であることを必要とした層にかなりの読者がいたことは疑いない。(45)

この，1部6ペンスという値段は，18世紀の廉価本について標準的な値段であったようだ。そしてそのような廉価本のなかには，すでに述べたように

分冊出版の形態による本がふくまれていた。

19世紀にはいると本の値段が騰貴し，一方ナポレオン戦争による重税のために，本の購買力は一般に低下した。その時期に中流階級が本を買うかわりに各種の図書館に依存したのと同様に，1冊1ペニイで借り出せる貸本屋，メソジストや他の非国教徒たちが主体となって運営しているブック・クラブ，教区教会が中心となった簡易図書館が，理想的というにはほど遠い状態だったが，労働者階級の読者に利用されたようである。(46) また18世紀以来，ロンドンのような都会では，数多くのコーヒー・ハウスが新聞や雑誌を買う余裕のない人々に，それらを読む便宜をあたえたし，新聞売りが1時間1ペニイで1部の新聞を何人にも読ませるようなこともおこなわれていた。(47)

19世紀の始め，1830年頃までの時期に労働者階級が読む機会のあった廉価な出版物は大別して3個のグループに分けられる。第1にラジカルな政治的主張を内容とするもの，第2にニューゲイト・キャレンダー的，あるいはセンセーショナルなゴシック・ロマンス的な読み物の分冊出版，第3に諸種の宗教団体による刊行物。

ナポレオン戦争後の，大量の失業者と社会不安を背景に，ペインが始めた労働者のためのジャーナリズムの運動は，ウイリアム・カビット（William Cobbit）の手で再燃した。1816年にその主宰するウイークリイ，『ポリティカル・レジスター』（*Political Register*）を従来の1シリング半ペニイの形のほかに，1部2ペニイの縮刷パンフレットの形式で出したのが成功して，一時は7万部も出たという。この種の運動は政府の弾圧のもとで迂余曲折を経ながら続いてゆく。

急進的政治主張をもりこんだ新聞に課税という形で加えられたところの弾圧から，センセーショナルな読み物の分冊出版は自由だった。当然政治的弾圧と併行してその種の読み物は販路を拡張した。少年のデイケンズが買って読んだあの『テリフィック・レジスター』もそんな読み物のひとつだったと推定される。

宗教雑誌も廉価版の努力をしていた。例えば先に述べた『ウエズリイアン・メソディスト・マガジン』の1822年の趣意書には雑誌を買うことのできな

い貧しい人々のためにめ，毎月そうした読者にもっともふさわしい記事を抜粋した1部6ペンスのスモール・ナムバーも発行する，との但し書がついている。(48)

勿論，貧しい階層にも，という意図にもかかわらず，社会の最下層部にはいかなる廉価本とも縁のない文盲の人々が存在したであろう。読者の層は下にむかって拡大したものの，その下限は熟練労働者，店員，家事使用人どまりであったと考えられる。(49) ともあれその下限まで，ラジカルな思想，あるいは殉教者伝やニューゲイト・キャレンダーが代表するセンセーショナリズム，時にはその両方が滲透していった。

このような経過をへて，ニューゲイト・ノヴェルが出はじめる1830年頃には小説の読者層は上流・中流階級の人々のみならずいわゆる「大衆」と呼ばれる人々の或る部分にも及んでいたと思われる。新たに読者のなかに加わりはじめた大衆の存在を統計的に数字で示すことは不可能であるにせよ，ニューゲイト・ノヴェルにたいする識者たちの非難，つまりインテリではなく趣味も洗練されていない一般読者が文学の質を落すのだという主張がその推測を裏付けている。エインズワースの『ルクウッド』について，或る書評は冒頭にこう書いている。

「我々自身の愉しみのためなら，我々は『ルクウッド』のような種類の本をとり上げることはしないだろうが，しかし半ば超自然的なもの，ほとんど不可能なこと，絶対にあり得ないようなことをよろこぶ多くの読者たちがいることを我々は知っている。だから我々自身の特別な，いうなればより洗練された趣味にはこだわらずに，この作品を公平に紹介することにしよう」(50)

やはりエインズワースの『ジャック・シェパド』の書評には「本の需要が大衆にまで及んだ結果」劣った文学がまかりとおるようになったとある。(51)

一般読者の程度の低さを非難した書評が殊にエインズワースの作品に集中しているのは偶然ではないだろう。上の引用にもあるように，超自然的な謎や，あり得ない事柄が頻出する彼の作品は，ニューゲイト・ノヴェルのなかで最もセンセーショナルで大衆うけする要素を多くもっていた。鋭敏な社会

的関心をもつ労働者階級の読者たちが，その文学的趣好においてはセンセーショナルなものを好んだということは充分あり得ただろう。

1830年代について特記しなければならないのは，この時期に新しい諸技術の導入によってさらに安い新聞や定期刊行物の大量生産が可能となったことである。特定の政治的立場をもたず多方面にわたる実用的な知識を提供するペニイ・マガジン(*The Penny Magazine*)のようなウイークリイが出現し，一時は20万部の発行部数をもった。(52) ペニイ・マガジンが打ち出したりスペクタブルな線が，「廉価な出版物はセンセーショナルな読み物か，ラジカルなプロパガンダである」というそれまでの観念を変えた一方では，1840代に現われたいわゆるペニイ・ドレッドフル (penny dreadful) とよばれるどぎつくセンセーショナルな続き物形式の読み物がペニイ・マガジンのような雑誌の読者を吸収してゆくという現象もあった。ペニイ・ドレッドフルの名は部が1ペニイであったことに由来しているが，そうした読み物の出版業者たちがソールズベリ・スクェアを本拠にしていたことからソールズベリ・スクェア・フィクション(Salisbury Square Fiction)と呼ばれることもある。エドワード・ロイド (Edward Lloyd) レノルズ (G. W. M. Reynolds) トマス・ペケット・プレスト(Thomas Peckett Prest)ジェイムズ・マルコルム・ライマー (James Malcolm Rymer) 等が代表的な作者だった。プレストの『吸血鬼ヴァーニイ』(*Varney the Vampire*, 1846) やレイノルズの『狼男ワグナー』(*Wagner, the Wehr-Wolf*, 1846—1847) のように近年複刻された作品もある。こうした続きもの形式でロイドが出した小説は1847年には38篇でピークに達したという。(53)

このような大衆の読み物の内容にたいして，ニューゲイト・ノヴェルは多大の方向づけをした。もともと上にあげた作家たちは，上中流の読者に人気のある作家の剽窃を多くおこなっており(54) 『ピックウィック・ペーパーズ』が出れば『ペニイ・ピックウィック』(*The Penny Pickwick* 正式の題名は *The Pasthumorous Notes of the Pickwick Club,*)『オリヴアー・ツイスト』が出れば『オリヴァー・ツウイス』(*Oliver Twiss*) を出すという風だった。当然ペニイ・ドレッドフルにはニューゲイト・ノヴェルの焼き

直し風のものが多くあらわれた。いちいちの作品の内容や，作品の数について知ることはできないが，彼自身そうした読み物の作者であったトマス・フロストの残した回顧録（Thomas Frost, *Forty Years' Recollections*, 1880）が当時の様子を伝えている。フロストによれば，或る者はエインズワースの模倣をしてクロード・デュヴアルやデイック・ターピンの冒険や犯罪を主題としたロマンスを書いていた。また別の作者は，「エインズワースやブルワー・リトンがあのようにかきたてた嗜好をみたすような，ニューゲイト・ロマンスを書いた」(55) という。ニューゲイト・ノヴェルが及ぼした影響を推しはかることができよう。

この回顧録は1880年に出版されているが，その時点から見てフロストはソールズベリー・スクエア・フィクションを次のように位置づけている。

「それ（ソールズベリー・スクエア・フィクション）は，50年前に大衆がよろこんだマモス街のバラッドや，「最後の言葉」やハイウェイマンの話や，悪魔の伝説と，今日大衆がたのしんでいるより健全でより洗練された文学とをつないでいる輪である。（中略）少年をロックやペイン，あるいはアジソンやスティールのきまりきった著作にしばりつけて，彼に読書欲をおこさせようとしても効果がないのと同様に，フェアバーンやビッシがあたえたような知的滋養物をやっとこなしたくらいの人々に，ブルワー・リトンの小説を，よしそれが彼らの手に届いたとしても，鑑賞することを期待するのは無理だっただろう」(56)

しかし1840年代には，ペニー・ドレッドフルの出現と人気は，多大の不安をもって見守られた。大衆に読書の能力が普及することによって，政治的急進主義が勢を得るという予測が，それ以前から支配階級を不安にさせていたが，加えて大衆の好むどぎつい犯罪小説の影響が彼らを暴力的行為に走らせるのではないかという危惧が生まれた。そのような大衆文学にインスピレーションをあたえたニューゲイト・ノヴェルに風当たりが強かったのも当然である。ニューゲイト・ノヴェルは大衆に迎合した下等な文学であるのみならず大衆の騒乱を準備するような危険物とみなされた。

だが事実はむしろ逆だったようである。アルティックの『ヴイトリア朝の

犯罪研究』は『英国の一般読者』の副産物のような本だが，『英国の一般読者』のような緻密周到な学識にふれるとそれにうらづけられた見解は信じないわけにはいかない。『ヴィクトリア朝の犯罪研究』のなかで彼は犯罪ニュースや犯罪を扱ったセンセーショナルな読み物は，（それらと対照的なエヴァンジェリカリズムの運動と同様に）むしろ政治的急進主義のほこ先をやわらげたのだと述べている。(57) 殺人の報道を熱狂的に追いかける点では階層の上，下の区別はなかった。中産階級を対象にしたジャーナリズム，労働者にむかってラジカルな政治的主張を伝えるウィークリイも共通して，販路拡張のために犯罪，就中殺人の記事をふんだんにのせた。そうしたニュースはあらゆる階層の人々の，いはば共通の広場であり，それはどれほどか社会的緊張をやわらげた，とアルティックは述べている。また犯罪について知りたいという気持が無智な人々のあいだに文字を読む能力をひろめた。文字の読めない者たちが読める者をとりかこんで殺人事件の報道に聞き入った様子は，ディケンズの『おおいなる遺産』（*Great Expectations*, 1860—1）のなかでウオプスル氏が新聞を朗読するくだが生き生きと描き出しているが，聞くだけでは満足できない人々も当然いただろう。読む能力の普及によって読者が増加し，新聞，雑誌は大企業へと発展してゆく。このような概観をおこなってから，アルティックはこう言う。

「ヴイクトリア女王崩御の時点で存在していた英国が殺人の産物だというのが誇張であるとしても——多分それは誇張だろうが——少なくともこう言うことはできる。つまりそれ以前の八十年間におこなわれたような殺人事件，またそれらについての度はずれた報道がなかったならば，1901年の英国社会は全く異なった社会であっただろう」(58)

同様にユニークな役割を，1830年代から40年代にわけてのニューゲイト・ノヴェルも英国小説史上でになった。それは犯罪者と殉教者をめぐって幾世代もの英国人が共有したイメージからインスピレーションを汲みあげ，それに肉づけをほどこして多くの小説読者を惹きつけた。その結晶作用の直接の引き金となったのは，刑法改正の問題に端的にあらわれているような社会問題への関心だった。読者層が急速に厚みを増しつつあった一方では，大衆の教

化が社会不安を生むという信念が支配階級に根づいており，そのなかにもりこまれた犯罪や暴力の描写が人々に悪影響をあたえるという危惧から，ニューゲイト・ノヴェルは非難の対象となった。たしかに1840年代に出現した大衆文学にたいしてニューゲイト・ノヴェルは多大の方向づけをした。しかしペニイ・ドレッドフルのような読み物のセンセーショナリズムが，むしろ大衆読者の関心を政治からフィクションの世界にむけさせたのだとすれば，非難はむしろ的はずれだったと言えよう。

やがて1860年代には公開処刑が廃止され，絞首台にまつわるイメージは人々の心からうすれていった。大衆の読み物も次第に洗練度をまし，ペニイ・ドレッドフルはもっぱら少年の読物となっていった。結果的には『虚栄の市』によって終止符が打たれた形でニューゲイト・ノヴェルをめぐる論争も過去のものとなっていた。だが産業革命を経た英国社会が一応の安定を見，文壇ではいわゆるリアリズムの手法が支配的となる直前の一時期に出現したこの小説群は，意外に広い歴史的裾野をもっているようである。

註

＊この小論はすでに発表した以下の論文，および未発表のエインズワースに関する論文のための序論として構想されている。

Things as They Are—A Study of Godwin's *Caleb Williams*
（東京女子大学英米文学評論15巻２号）

Bulwer-Lytton as an Author of Newgate Novels
（東京女子大学「論集」24巻１号）

Thackeray's "Anti-Newgate" Attitude
（東京女子大学「論集」25巻２号）

The Newgate Novels of Charles Dickens
（東京女子大学「論集」26巻２号）

(1) Ex. *Athenaeum*, Oct. 26, 1839, p. 804.

(2) Ex. Walter C. Phillips, *Dickens, Reade, and Collins, Sensation Novelists*, New York, Russell & Russell, 1962 (First pub. 1919), pp. 164-65.

(3) 正式には Edward George Earle Lytton Bulwer 1843年以降はラストネームが Bulwer-Lytton となるが，ここで主として取り扱う作品を書いた時期にはまだ Bulwer であったので，以下では簡略のためブルワーに統一する。

(4) Bulwer, *Paul Clifford*, London, George Routledge and Sons, n. d., p. vii.

(5) Quoted by Leon Radzinowicz. *A History of English Criminal Law and its Administration from 1750*, 3 vols., London, Stevens and Sons, 1948, vol. I, p. 3.

(6) *Ibid.*, 636.

(7) Sir James Fitzjames Stephen, *General View of the Criminal Law*, London, Macmillan, 1890, p. 51.

(8) *Ibid.*, 48.

(9) Phillip Collins, *Dickens and Crime*, London, Macmillan, 1965, p. 4.

(10) *Paul Clifford*, 433-434.

(11) Louis Cazamian, *The Social Novel in England, 1830—1850*, London, Routledge & Kegan Paul, 1973, pp. 40—41.

(12) Radzinowicz, *op. cit.*, 600—604

(13) *Ibid.*, 733—4.

(14) *Paul Clifford.*, 434.

(15) Henry Mayhew, *The Great World of London*, p. 99.

(16) Michael Sadleir, *Bulwer and His Wife, a Panorama, 1803—1836*, London, Constable, 1933, p. 144.

(17) Sandra Lee Kerman, "Introduction," *The Newgate Calendar*, New York, Capricorn Books, p. v.

(18) Dickens, *Dombey and Son*, London, Oxford Univ. Press, 1970, (The Oxford Illustrated Dickens,) p. 22.

(19) Thackeray, *Yellowplush Papers, etc*, London, Oxford Univ. Press, n. d., (The Oxford Thackeray with Illustrations,) p. 169.

(20) Victor Alexander George Robert Lytton, second Earl of Lytton, 1876—1947, *Life of Edward Bulwer, First Lord Lytton*, 2 vols., London, Macmillan, 1913, vol. I, p. 389.

(21) ニューゲイト・ノヴェルを攻撃したサッカレイのエッセイに "Horae Catnachianae" という題名のものがある。ニューゲイト・ノヴェルに現われる下層社会の描写がありのままの姿を伝えていないという観点から，それらの描写を下層社会の文学の代表ともいうべきキャッナックのバラッドと対比させるのが，そのエッセイの意図である。

(22) Richard D. Altick, *The English Common Reader*, Chicago, The Univ. of Chicago Press, 1967, pp. 287—8.

(23) George H. Ford, *Dickens and His Readers*, Princeton, Princeton Univ. Press, 1955, p. 6.

(24) Henry Mayhew, *London Labour and the London Poor*, 4 vols., (republica-

tion of the work as published by Giffin, Bohn, and Company 1861—1862,) New York, Dover, 1968, vol. I, pp. 221—6.

(25) George W. M. Reynolds, *The Mysteries of London,* Series I, 2 vols., London G. Vickers, 1845, vol. I, p. 73.

(26) "The Last Words of William Huggins and John Mansfield, etc, June 19th, 1783 at Worcester," *American Broadsides,* Massachusetts, Imprint Society, 1971.

(27) 1820年代の有名な殺人事件のひとつローダー事件をモデルにした小説『赤い小屋』(Robert Huish, *The Red Barn, a Tale Founded on Fact,* 1828) の次の一節などはきわめて暗示的である。

「人生は悪の場であるし，倦怠といら立ちの絶え間のない繰り返しだから，たまにしか現れない束の間の快楽を貪欲につかもうとするのは人間にとって無理からぬことである。しかしそのような快楽の追求は名誉を犠牲にすることであり，その後に悔恨という罰が来るのは，運命と自然の厳格な掟なのだ」(*Ibid.*, 382)

(28) John Forster, *The Life of Charles Dickens,* 2 vols., London, n. d., vol. I, p. 48 n.

(29) The *Methodist Magazine,* Feb. 1821, p. 115.

(30) *Ibid.*, Dec. 1815, p. 513.

(31) Ex. *Martin Chuzzlewit,* (The Oxford Illustrated Dickens,) 102.

(32) *Foxes, Book of Martyrs,* New Jersey, Spire Books, 1974, p. 122.

(33) Altick, *op. cit.*, 56 ; Louis James, *Fiction for the Working Man, 1830—1850,* London, Oxford Univ. Press, 1963, p. 8.

(34) Altick, *Victorian Studies in Scarlet,* London, J. M. Dent & Sons, 1972, p. 50.

(35) Quoted by Keith Hollingsworth, *The Newgate Novel, 1830—47,* Dctroits, Wayne State Univ Press., 1963, p. 7.

(36) Cf. my own essay, "The Newgate Novels of Charles Dickens," *Essays and Studies,* Tokyo Woman's Christian College, Vol. 26, No. 2, p. 75.

(37) Altick, *The English Common Reader,* p. 123.

(38) 但しいくつかの大衆むきのピリオデイカルには，依然ミネルヴァプレス・ノヴェルの系統の物語が姿を見せていた。(James, *op. cit.*, p. 72.)

(39) E. P. Whipple, "Charles Dickens," *North American Review,* LXIX (Oct. 1849), p. 391.

(40) Matthew Whiting Rosa, *The Silver Fork School,* New York, Kennikat Press, 1964 (frist pub. 1936)

(41) Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties,* London, Oxford Univ. Press, 1961, p. 75.

(42) A. E. March, *The Development of the Detective Novel*, London, Peter Owen, 1968, pp. 11—14. 但しマーチ夫人のいうニューゲイトノヴェルは，この小論で定義している小説群よりさらに広い範囲におよんでいる。

(43) *Ibid.*, 21—22.

(44) Altick, *The English Common Reader*, 32—34, 69—70.

(45) *Ibid*,. 70.

(46) *Ibid.*, 217—223.

(47) *Ibid.*, 322—3, 19世紀初題の出版物やジャーナリズムに関する以下のインフォーメーションも主としてアルティックに負っている。

(48) *The Weslayan Methodist Magagine*, Jan. 1822, p. 6.

(49) Altick, *op. cit.*, 83.

(50) *Athenaeum*, May 3, 1834, p. 323.

(51) *Ibid.*, Oct. 26, 1839, p. 804.

(52) Altick, *op. cit*, 334—5.

(53) James, *op. cit.*, 38.

(54) *Ibid.*, 45—60.

(55) Thomas Frost, *Forty Years' Recolletions*; *Literary and Political*, London, Sampson Low, Marston, Searle and Rivington, 1880, pp. 86—7.

(56) *Ibid.*, 95.

(57) Altick, *Victorian Studies in Scarlet*, pp. 41—42.

(58) *Ibid.*, 289.